武田泰淳全集

第三巻

筑摩書房

武田泰淳全集　第三巻
昭和四十六年七月十七日　第一刷発行

著者　武田泰淳
発行者　竹之内静雄
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話　東京(元)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三
郵便番号　一〇一―九一
印刷　株式会社　三松堂
製本　和田製本工業株式会社

(分類) 0393 (製品) 72403 (出版社) 4604

武田泰淳全集　第三巻

第三巻　目　次

椅子のきしみ……3
母の出発……15
筋　肉……36
情婦殺し……55
物言う鼠……82
女の部屋……85
獣の徽章……107
由井正雪の最期……126
めがね……135
うまれかわり物語……150
春日異変……189

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

F花園十九号……205
冷　笑……275
第一のボタン……294
あいびき……368
巨　人……381
女地主……400
風土記……450
奇蹟の掌……462
宇宙博士の恋愛……481
解　説……松原新一……497
解　題……509

小説3

杉並区天沼にて　昭和二十六年（三十九歳）

椅子のきしみ

「主任さん、お電話です」女事務員が知らせたとき、森にはすぐ三島幸子からだな、と予感がした。そして「また、五万円かな。そう来ると思った」と、銀行を訪ねてくる腹に一物ある客と応対するまえの、気軽そうな、しかし自信ある様子で起ち上った。

「あのね。森さんでいらっしゃいます？　あの、わたくしね、ちょっとお話したいことがありますの。むずかしいことでも何でもありませんのよ。ただちょっとね」と、ごく自然な、そのくせ甘い気持のよい声が、エボナイトの受話器のなめらかな耳ざわりの中に、たのしげにきこえた。

「……もちろん、お金のことではありませんの。そんなこと忘れて、森さんと一日、楽しくお話したいと思いまして。子供たちもお友だちのおうちへ、およばれして、わたくし一人ですの。ええ、お昼少し前がよろしいの。料理をちょっとつくりますから。来て下さる？　うれしいわ。ほんと、とてもうれしいの」

会って感じよき女性一人、御紹介申上げます、と友人のそえ手紙にあった。「夫君は入院中。子供二人。金の相談であること言うまでもなし。貴兄の高等数学は、この女性に対して、いかなる計算をなすや。小生のもっとも興味あるところです」高等学校の同級である、その皮肉な学者に紹介されて、三島幸子は、十日まえに、森の自宅を訪問した。

たしかに愛くるしい三十女であった。少女のもっている、あのわざとらしさのない媚びがその小柄な全身、すばらしく白い丸顔にそのまま残っていた。愚美人とでも評すべきだろうか、底ぬけのほがらかさが、繊細なまぶたや、小さな口もと、大きな両眼にかがやくようにあふれていた。

「……あの、わたくし何て言うんですかしら。とても男のかたには好かれるたちなんですのね。今度の部屋をさがすについても、そのために、そりゃとてもいろんな目にあいましてね」

ジメジメした貧乏ばなしを、おとぎ話に作りかえ、自分がその主人公の可哀そうな女王にでもなったつもりなのか、女は自由に喋った。

「部屋を世話してあげると言って下さる方は、立派な重役様でしてね。主人が新聞社につとめていたころのお友だちなんですの。外国へも何べんも行ってらっしゃった方でね。主人はまだ入院していませんでしたが、主人のいいつけでわたくし一人で部屋を見に行ったんですの。もちろん立派な西洋館でしたの。その部屋に入ると、その男の方、いきなり、ドアをおしめになって……。ボクはキミを一目見たときからスキだった、とおっしゃって……。それからギュウウッと抱きつきなさってね。わたくし、もう、びっくりしてしまって、大きな声あげて、必死になって騒ぎましたのよ」

悪戯な少年のように客がよく澄んだ眼で、こちらに笑いかけると、森は応接間の椅子のきしむのを避けるため、ジッと身じろぎもしないでいた。まだ三月のはじめだというのに、自分の肉体の周囲だけ、ポッテリとぬくもっていた。

「……もちろん、わたくし、死ぬつもりで身を守りましたから、どうっていうこともなかったんですけど。おどろきましたわ、男の方って。それから女学校の五年のころ、新劇に入ろうとしてたんですの。そのときも、有名な俳優の方が」とその話もした。俳優にいどまれて、二階から跳びおり、足袋はだしで逃げかえったという話だった。そんな事件が度重なっても無理もない、あまりにもあけはなされ、無防備の、柔軟なすきとおるような肌が、紺の古い男物を仕立てなおした夫人のスーツの下に感ぜられた。

翌日、五万円はすぐ融通した。それを手渡した以上、あとまた金が出ることは覚悟している。それはもう、玄関のベルで、病身の妻が子供の着がえをさせている間に、森がドアをあけたとたんに決定した。赤と紺の手袋をはめ、みすぼらしい大きな外套の下に身をすくませ、叱られた女学生のようにうるんだ瞳で、寒い午前の外気の中に夫人が立って、こちらを見上げているのをみつめた数秒間に、きまってしまったことであった。

銀行員の森は職業がら、きちょうめんな生活を送っている。貸付係りといえば、このはげしい世の中に、神経のつかれる仕事ではあるが、暮し向の不安はないといえる。金を借りたがる事業主たちは、週に三、四回は酒の席へ森をつれ出す。酔っても寝こむだけで乱れないたちだし、しいて騒ぎをひきおこす子供らしさも失せていた。女をあてがわれても、その夜のうちにかならず帰った。金網や木の柵や、用心ぶかい一線を張った出納口の内部から、昼休みでも外出しないで、ヒッソリしたコンクリート建築の奥にひ

そんでいる。一銭の金が多くても少くても、その日の終らない、正確精密な機構の中にいれば、不安も冒険もないように見える。

「僕の方も楽しみにしています。では日曜に……」受話器をかけても、女のやさしい吐息が、駈け引きで埃くさくなった、キッチリしめあげたネクタイにしみとおっている気がした。東大法科に入学する直前まで、高等数学が好きで、三島夫人を紹介して来た皮肉な友人と共に、文科に必要のない、アルファ、ガムマー、サイン、コサインもいじくったことがある。教養派の多い一流銀行でも、あまり見なれぬ一風変った考え深いおもちで森は席へもどった。

腰をおろすと、あたりを見廻す前に、回転椅子はグウッと鳴り、背をもたせかけると、心棒のあたりがギイッときしんだ。おそらく先刻、電話へ起ち上ったときにも、椅子はきしんだはずであった。その時は気づかなかった。まだ新しい緑色のクッションは坐りごこちがいいが、金属の支柱に油が切れているため、日に何回となくかすかに鳴りつづける。それが三島夫人の招待をうけた今では、何かしら不安と冒険を暗示する、いわばフロイド的な音にきこえる。過去と未来の重々しい闇の峯に、あぶなっかしく立っている、現在の自分の不安定を明るみに出す合図のように、鋭くそれが神経を刺した。

「ソヴィエットにも銀行はあるぞ。だから大丈夫さ」そう考えるときのいまいましい緊張とも、それはちがっていた。

「ともかく、東欧遊星諸国家や、アジア被征服諸民族との、彼等の貿易の決算は、銀行でやるんだ。それから、かんじんかなめの、彼等の都市労働者の賃銀支払いは、銀行の帳簿をとおった紙幣でされるんだ。銀行というものは、こりゃ近代社会に必要かくべからざる永久の重要機関で……」そんなサラリーマンらしい自己保存のソロバンの音とも、質がちがっている。ともかく今の森には、そのきしみが、女、女の肉体、それを抱きしめる自分を想い出させてしかたがない。

「男女関係というものも、つまらないものだわね」という、酒場のマダムの大まじめな述懐もうなずける年頃であった。

「性愛とか何とか言ったって、あれには発展というものがないでしょう。ただああやって、肉体のあれするだけで、いつまでたっても、発達も変化もしませんものね」

だが銀行の椅子があるかぎり、一定の生活を保証されている森にとっては、その椅子をきしませるような慾望のゆれ動きは、それだけで、おびえと興奮を充分もよおさせるものであった。

きしみ。木組のきしみ、竹の幹のきしみ、鉄のバネのきしみ、藁蒲団のきしみ。つまりは寝台のきしみが、今の森

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

には色情の陶酔より、むしろ自分にそぐわぬ、危険な音楽のようにさえ思われる。

それは森の青春時代の貧弱な性慾体験が、戦争と共にはじまり、荒廃した戦禍の巷のみすぼらしいベッドの上にとどまっているという特殊事情にもよるのであった。

昭和十五年、二十三歳で森は応召した。

乗船を待つ間、神戸で、森たちは波止場の海を前にした安宿にとまっていた。ピュイーッピュイと、鋭い汽笛が、たえず鳴った。ヴォォゥとひびく重々しい汽笛とちがい、鳥が懸命に叫ぶようで、遠くひろがって、しずまりかえっている海の面積に反抗するような音であった。

朝早くコーヒー売りが白服白帽子で裏の路をとおる。純白のエナメル塗りの皿に、のせられた茶碗に、ポットからつがれる熱いドロリとした液を受け、すすりながら宿屋にもどる、そんなのんきな一週間であった。

戦闘帽も軍服もまあたらしいのを支給された。私物の使用も許されているので、森は赤と緑の、母の編んだあたたかい毛の靴下をはいていた。陽にも焼けず垢もつかず、大半は独身者で、元気よく笑いながら行く姿を、愛想のよい神戸の女たちは「まあ、きれいな兵隊さんね」とふりかえった。

夜間の外出は禁止されているので、白昼、四、五名つれだって遊廓へ行った。赤い鳥居がそんな場所らしく、片隅の石垣の前に立ち、小学生はそこでも帽子をぬいで彼等に挨拶した。

「この人はモダンだからね。西洋美人みたいなひとがいいよ」と仲間は婆さんに、森にかわって言った。

「ああそう、モダンな子ね。承知しました。それじゃメリイさんがいいな。メリイさあん」と婆さんは呼んだ。相手は西洋人くさくはないが、色白の大きな身体の女で、くずれた感じもなかった。「僕ははじめてだ」というと「そうね、そうだと思ったわ」と、こちらを見つめてから言った。寝台にのぼるとき、昼間ではあり、ソソクサと、めんどうな軍隊の下着をほどいたりするのに、事務的なわざとらしさをおぼえた。そしてもちろん、寝台はきしんだ。手術台にでもものぼったようで、森はその音にギクリとした。

部屋を出て、戦友たちをドアの外からよぶと、「なあに、まだこれからよ」と中の女は言った。勘定をするとき、約束の金額より多いので、たずねると「水菓子やなんかとったから、その代金ですよ」と婆さんが答えた。

「そんなはずはねえぞ。ボルなよ」と兵士たちは騒いだ。森もそれにつられて、約束だけ支払って、二階を下りようとする。「ダメよ。払わなきゃ。ダメよ」と女は腕をつか

まえた。その力は意外につよく、階段の中ほどで身動きできなかった。しかし女はやがて「そうね。いいわ」とおとなしくはなしてくれた。街へ出ると、長い入院から開放されたような、明るい気分がした。「寝台って、いいもんだな。ギュウギュウ鳴って」と仲間ははしゃいでいた。

後方勤務をあたえられた森たちは、慰安所へ通うひまはあった。東京を出る時、腹巻きに入れた金も、まだ充分あった。だが森は一年ばかりはあまり行かなかった。夏は鼻にうかべた汗、冬は病身らしい咳き入り方、それに閉口した。ことに日本から来た女たちは、半島や中国の女たちより一段上だという表情をむき出して、兵士たちまで馬鹿にする、それがやりきれなかった。

「なんだ、馬鹿。内地だったら、お前たちなんか何だ。相手になんぞするもんか」用がすむと、そんな棄てぜりふで出て行く兵士もあった。旗日にはその女たちが白粉や和服でかざりたてて、愛国婦人会の旗の下に集っていた。

それが上陸一周年をむかえたころから、今までの神経質な自分を嘲笑するように、森は突然、慰安所を好みはじめた。自分で自分の狂暴なふるまいにおどろく。泥酔しては禁止された時間に、憲兵の眼をぬすみ、女の部屋によろめき入る。牛のように鈍い中年の大女。病勢を示すしゃがれ声の女。なんでも相手にした。いつも売れのこる女は、珍しい上客に、とっておいた羊羹をさし出し、親切にも口の中までおし込んでくれた。そして「あんた、いつまでここにいるのかね。わたしが好きかね」とたずねた。サック代を請求する女には「サックは軍で支給するはずだ。文句があるなら主人をよべ」と怒鳴りたてた。何が面白いのか、自分でもわからなかった。情緒も快感もあるわけはなかった。

部隊の少くなった小都会などでは、女たちは雨や寒さの中にとりのこされたように、ションボリしていた。寺子屋風な学校のあとに開設された場所では、中国の女の幽霊が出るとうわさされた。農村から馳り出されたらしい半島の女は素朴におそろしがった。「怕くて一人では便所へ行けないよ。一緒に来て」とたのまれることもあった。淋しい庭をとおって、門のわきまで連れて行ってやると「待っていて」とせがまれ、湿っぽく、あかりもささぬ闇の壁にながいこともたれていなければならなかった。

狭い竹の寝台のおかれた土間から、寒さがはいあがって来る場所もあった。泥土と、煤と、炊事場の煙の匂いがした。金をもらうと中国の女はすぐ若い男にその一部をわたして、コカインを分けてもらった。白い薬品がほんのチョッピリ掌の上にのると、銀紙に落して、大切そうにランプの火であぶった。パイプもないのか手製のブリキ管で、そ

のとぼしい煙を注意ぶかく吸った。巻煙草に入れて吸う女もあった。言葉かずも少く、上品にひらいた大きな両眼をジッとすえて、もはや何もかも知りつくした、この世はすでに終っているという姿で動かなかった。よく澄んだ瞳の下は黒くくまどられたように落ちくぼんで、おどろくほど痩せさらばえた女なのに、物腰のおちつきは、もとは相当の家庭の人かともおもわれた。うすい、よごれ切った紅地の蒲団のまん中に、森が嘔吐しても、「かまわないよ」とものうげに言うだけで、とがめだてもしなかった。そんな夜は竹の寝台のきしみは、酔いでもうろうとした森の耳に、特にかなしげな意味をもってきこえた。

いよいよ帰還ときまると、南京城外に集中してむされるように暑い二週間をすごした。めくるめくような光線の中を、城内中央のロータリーまで、軍用のバスで通った。ロータリーから先は、洋車の車夫がこっそり案内した。繁華な街中には、ふかしたての肉まんじゅうの湯気がただよい、肉類を油でいためる威勢のよい音、日がな一日、銅銭を積んでは麻雀にふける市民の喧騒がみなぎっていた。大通りを一歩それて住宅街に入ると、灰色の壁ばかりつづく狭い路は迷路のように入り組んで、時たまポカリとあいた空地には、柳の青々となびく水たまりの中で、家鴨が啼きさわいだ。

車の着いた場所はあたりまえの民家で、三間ばかりの部屋は、家具類はみんなもち去られたのであろう、一部屋に一つずつ寝台だけが置かれてあった。森たち三人が門をくぐると同時に、内にいた若い中国人は、すぐ入れちがいにすり抜けて出て行った。

「三人ならちょうどいい」と、色の白さの目立つ中年の女が、よくわかる北京官語でハキハキ言った。商売は最近はじめたのであろうか、附近の家でさっきまで米でも洗っていたらしい若い女が二人、彼女のそばに化粧もせずにボソッと並んでいた。

白い虫よけの帳のついた鉄製の寝台は、勢いよく腰をおろすと、ギギッと鳴った。紫の模様のある蓆が、鉄網の床と蒲団にはさまれジワリときしんだ。「お飲みなさい」と魔法瓶から注いで中年女にさしだされた茶碗の湯はなまぬるかった。少し骨ばって水荒れした白い手で飲まされていると、母か姉に看病されているくすぐったさがあった。

「フフン」と頬骨のやや出た女は、いかり肩の腕をのばして、冷笑しながら森の軍帽をぬがした。しっかり者の主婦らしく、あきらかに森を小馬鹿にしていた。性慾は別にして、そんなツンケンしたような、また技巧的な女の態度を、森は面白いと思った。

「早くしなさい。憲兵が来るから」と、すました顔で言う

と、色あせた水色木綿の短い靴下をはいた、藍衣のすそを、クルリとまくった。「フンフン。よしよし。坊や、おとなしく」看護婦のように手ぎわよく、女は彼をあしらった。

女の身体は油けがなくゴツゴツしていた。雨天体操場で二、三分運動したように、サッパリはしていたが、別だんの感興もなかった。門と家の間の石だたみの上に出ると、乾いた風が肌を吹きぬけた。そして降りそそぐ真夏の光線の下で、灰色の煉瓦でかこまれた狭い中庭は、どこもかしこもギラギラとかがやいた。ひっそりした街のどこかで蟬が鳴いた。

ふと見ると、こわれかかった竹の安楽椅子の上で、五、六歳の男の児が遊んでいた。中年女が森の後から、髪をなおしながら出てくると、子供は両手をさしのばして、何か叫んだ。いそがしげに振るその手つきには、母親からおいてけぼりをくった幼児のうらめしさが見えた。

「ああ、よちよち」すまなかったといいたげに、女はかがみこんで熱心に子供をあやした。子供が泣き出すと、困ったように森の方をふりかえった。起ち上ると、にくらしげに森をにらんで、布靴でトンと一つ石だたみを踏んで見せた。森の帽子を邪けんにもぎとって、自分がそれをかぶった。そして、おどけた顔つきを、子供の前につきつけた。子供はまだ泣きやまない。すると女は、おそろしげな表情で軍帽をつかむと、それを足もとに叩きつけた。「なんだ、こんなもの」中国語がわからないと思ってか、女はそう叫びながら帽子をさんざんふみつける真似をして見せた。

「ホラ、ごらん、日本兵なんて、怕くあるもんか。ちっとも怕くあるもんか」

森が怒り出しはしないかと気をつかいながらも、冗談と真剣さをつきまぜた態度で、それをつづけた。それから森の頭をぐるぐるなでまわして、ポンとぶつ仕草をした。

「これは馬鹿者だよ、この兵隊は。よく見てごらん」女は森の耳をつまみあげ、頬の肉をちょっとつねった。子供はおどろいてそれを見つめ、泣くのをやめた。「なんでもありゃしない、こんな奴」おとなしくしている森に安心してか、女はますます大げさな身ぶりをした。子供の前で日本兵を軽蔑してやる、馬鹿にしてやる、それがその負けずぎらいの母親にとって、せめてもの満足であることが、森にもよくわかった。その悲痛とも滑稽とも言いようのない一異国女の印象は、かなり強く森の脳裡に灼きつきとどまった。

それが寝台のきしみを聴いた最後であった。帰還して、貿易商の娘と結婚してから、敗戦後の今日まで、森はあわただしいベッドにあがったことはない。焼けなかった父の家の畳の上に楽々と寝て、善良勤勉な夫となって暮した。

もう一度、あのようなみじめな、あさましい、また考えようによっては野性をほとばしらせる行為におちこむこともあるまい。その必要もなかった。すべては若気のいたすところ、異常な戦地での、すでに過ぎ去った一事件にすぎない。しかし三島幸子の出現は彼に、あの青春のわななき、沈淪への傾斜を久しぶりで感じさせた。つまり、堅固なコンクリートの壁にとりかこまれ、厚い絨毯の上にどっしり坐った椅子が、意味ありげにきしみ出したのであった。

日曜は少し早めにでかけた。不意をおそって日常の暮しぶりを見たいという、貸付係りらしい調査ぐせが出たのかもしれない。教えられた住宅区は清潔な洋風建物が多く、進駐軍宿舎にあてられた家々には、白い立札に黒字の番号が記されてあった。よく陽のあたる温室のガラスはキラキラ光り、桃色のカーネーションの盛りあがる中に血のような花もまじっていた。コオン、コオンとテニスの白球の飛びかう、住宅区専用のコートでは、白人の青年男女が赤く陽やけしたたくましい腕を勢いよく振った。

幸子の住む家も簡素ではあるが、壁に蔦のからんだ、しっかりした洋館であった。三階の部屋に直通のベルがある、それを押すとき、森は親指の腹に大げさな運命の圧力を感じた。

朝食の最中だったらしい幸子は、口に何かほおばったままドアをあけ、「あ、森さんですの。どうぞどうぞ、まだ片づけもしていないんですけど」と少しあわてて挨拶した。主婦らしく、和服の上にエプロンをかけた姿が、かえって新鮮で、好ましいものに思えた。

三階の部屋は、屋根の傾斜と太い煙突を支えかつ隠すための巨壁がゴツリと三ヶ所ほどせり出していて、内部はかなりせばめられていた。食卓も椅子も、秩序もなくバラバラに置かれてあった。そして入るなり、するめの匂いが鼻をついた。食卓の土鍋には粥らしきものがうす白く残り、大皿にはするめの足が、細い枯木の根のように、少し紫がかった気味のわるい色でからみあっていた。そのほかに汁もつけものも見えなかった。

その食事のまずしさをごまかすように、三島夫人は「わたし、くにが長崎なもんですから、女学生時代もよく、教室でするめばかり嚙っていましたのよ」と言った。

子供たちはまだ外出していなかった。小学校四、五年の少女と、まだ五、六歳の男の児であった。「真珠ちゃん。健ちゃんが待ってますよ。早くおでかけなさい」と夫人は少女をせきたてた。「この子の組の級長さんでね、とても美男子で人気があるんですの。この子もすっかりその方に参っちゃってるんですのよ」

「ちがうわ、お母さま、あんなこと言って。御自分が健ち

ゃんのこと御好きなんでしょう」と、色こそ黒いが夫人に似て端正な顔だちの少女は、母をきつい眼で見かえした。

「わたしはそれほどじゃないわ」

「いいから、早く行っていらっしゃいってばあ」夫人は明るく笑いながら子供たちを送り出した。母の手にすがって、行きたくもなさそうだった男の児も、姉に手をひかれ、ふてたようなずり足で出ていった。

隣はトイレットと調理場を兼ねたごく狭い小部屋らしく、あけはなたれたドアから、白いタイル張りの床、それに白いバスのなめらかなへりが見えた。そして陰気に落ちる水道の滴の音が断続した。それは森がかつてはじめて慰安所を訪れた際と同様、よく晴れた日のまひる時であった。そして無遠慮に照し出される部屋の隅にはベッドが一台だけ置かれてあった。しかもそれは、ごく粗末な、零落の娼婦にこそふさわしいベッドであった。その黒塗りのところどころはげた四本の鉄の細い脚は、戦地のどこかで見かけたような錆覚さえ起きた。

「御一人じゃ、なかなか大変ですな」礼儀正しい中年紳士らしく、森は入院中の三島氏についてはたずねなかった。

「何しろ、こんな部屋なもんですからね」と夫人は森の気持にはかかわりなく、のんきに喋った。「バスはあるんですけど、お湯が出ませんしね。わたし外地にいたことがあるもんですから、お風呂はバスじゃないと、どうもいけませんの」

御馳走の支度にはとりかかる様子もなく、三島幸子は鳥のさえずるように、無邪気なお喋りをつづけた。ただそうやってとりとめもない女の話に聴き入っているだけでも、森は夢みるような陶酔を感じた。夫人はやがて安楽椅子から起ち上った。そしてベッドの傍に歩み寄り、そのへりに軽く腰をおろした。ふっくらと丸みのある上半身の重みで、薄い藁蒲団はしずかにへこみ、軟い腰の下でベッドはキキッと鳴った。それは異様にはげしい音のようにきこえた。どの慰安所のどのベッドが、半島や中国の、どの太った娼婦の臀の下できしむ音より、それは強く鳴った。何か悲痛のきしみにさえ思われた。

「ここへ一緒におかけになりません？」と彼女は言った。こころもち上気して桃色をましてはいたが、あいかわらずあどけない笑顔であった。森はしばらくためらった。自分の重量の下で、ベッドがもっとそうぞうしい悲鳴をあげるという予想が、彼をさえぎった。しかし匂うような女の傍によりそいたいという慾望が彼を大胆にした。坐ってみると案外にきしまなかった。

全く、酒場のマダムの名言ではないが、そこには「発達も変化」もないにちがいなかった。そしてこの三階の部屋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com